



表紙 「ののさま」

やざわ なな [慈光幼稚園]

Shinran
S50th
S80th

—〈2023年 宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年 慶讃テーマ〉—

南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

東京教区教化委員会報 ネットワークナイン

発行日 2021年4月1日

編集 教化委員会広報・出版部門

「ネットワークナイン」班 編集員

総編集長：本田 彰一（東京1）

チーフ：朝倉 俊隆（東京5）

佐々木誠信（東京4） 五島 大地（東京8） 中村 晃（茨城1） 大山 信敬（茨城2）

チーフ：田上 翼（茨城1）

坂東 性悦（東京2） 平松 正宣（東京3） 櫻田 純（東京6） 秦 顕生（湘南）

チーフ：鞠川 卓史（湘南）

内藤 友樹（東京1） 渡邊 尚康（東京3） 田宮 真人（東京8） 相馬 法道（茨城1）

発行 真宗大谷派東京教区教化委員会

〒177-0032 練馬区谷原1-3-7東本願寺真宗会館

TEL. 03-5393-0810 FAX. 03-5393-0814 Email. nw9@ji-n.net

ご意見、ご感想は上記連絡先までお願いします。

もくじ

特集

- 03 教区報恩講特集
-
- 19 法語ポスター
教区教化通信 総合調整総務会
- 21 真宗会館 30 周年記念式典 白山 勝久
教区教化通信 「同和」協議会
『現代語 唯信鈔文意』に対する東京教区「同和」協議会からの意見書について② 井上 英実
-
- 22 教区教化通信 教学館
- 23 私の出遇った言葉 内藤 望
教区教化通信 大谷保育協会
- 24 子育ての大地 益子 愛
首都圏教化推進本部
- 26 都市教化の扉
はい！こちら真宗会館です
- 28 駐在日記 佐々木 弘明
はい！こちら真宗会館です
- 29 所員のつぶやき 藤井 晃世
はい！こちら真宗会館です
- 30 退任挨拶 浮葉 貴大
- 31 敬弔・涌 本田 彰一

東京教区 報恩講 オンラインで 厳修

2021年1月28日(木)

テーマ

「南無阿弥陀仏

人と生まれたことの意味をたずねていこう」

サブテーマ

「今、であう」

感 話 高橋 昭彦 氏

(東京5組 存明寺 衆徒)

法話講師 海 法龍 氏

(三浦組 長願寺 住職)



新型コロナウイルス感染症拡大に伴う緊急事態宣言が発出される中、教区報恩講をオンライン配信により厳修いたしました。
今号では海法龍氏の法話、そして東京教区内各地で、リモートでお参りされた寺院取材しましたので、掲載させていただきます。
また、この度の教区報恩講厳修に当たり、報恩講企画会より寄稿いただきましたので併せてご覧ください。

真宗大谷派 東京教区

オンライン
報恩講
— 今、であう —

2021年1月28日(木) 13:00~

南無阿弥陀仏
人と生まれたことの
* 意味をたずねていこう



法話

かい ほうりゅう
海法龍氏

三浦組 長願寺住職

報恩講を勤めるといふこと

昨年も、東京教区の報恩講のご法話をさせていただきました。昨年と今年では、報恩講の風景がまったく違ってしまった。新型コロナウイルス感染症拡大により、今回の報恩講は、参詣者無しのオンラインという形をとらざるを得ない中での勤めです。しかし風景は違っているけれども、そこにかける思いの願いや情熱は、例年と同じであることを強く感じております。

今日を迎えるまで、この状況の中を、なんとか教区報恩講を勤めていきたい、法話を届けたいという報恩講の企画会、教区教化委員会、坊守会、教区会、教区門徒会、そして、教区内のご寺院、東京教務所、宗務出張所の職員の皆さんの情熱で、報恩講が勤められていることを非常に深く思います。このような状況ですから、オンラインも緊急時の行事の継続維持のためには大事な方法なのかもしれません。そういう意味でいうと、今まで出来ていたことが出来なくなる中で、改めて今までの当たり前で勤めてきた報恩講が、本当に有り難かったんだと、逆に教えられました。



来年は元の姿に戻っていかねければならないということをおもいます。

各寺院の報恩講も、皆さん悩み悩んで、悩み抜いて、いろいろな形で勤められたということをお聞いております。ただ、どういう状況であったとしても、報恩講をお勤めしないという選択は、本当はあつてはならないのではないかと思えます。私たちの真宗寺院の原点は、やはり報恩講にある。報恩講を一年の一番中心の行事として勤めてきました。

本山・東本願寺（真宗本願）においても、教区においても、各寺院においても、こういう形にならざるを得ない。そして、お齋も出来ないわけですが、来年、そのお齋がまた復活できるか、と悩んでいるお寺さんもたくさんあると聞いています。縮小して勤めているので、例年よりは手間がかからないわけですが、そうすると、どこかで「楽だな」という思いが出てきます。人間は面倒なもので、楽な方を経験すると、どうしても楽な方に気持ちが流れてしまうということも有り得るわけです。私がお預かりしているお寺でも、お齋は中止したのですが、やはり、そこに楽に感じていた自分がいきました。そうすると、改めて自分がどのような姿勢、どのような立ち位置で報恩講を勤めていたのかということが問われてくるのです。でもその問われていることが、とても大切なことではないかと思えます。

真宗のお寺では、毎年報恩講をお勤めしていますから、どこかでマンネリ化し惰性になってしまいう危険性を孕んでいるのです。お勤めすることが目的になってしまつて、「今年は参詣者が多かった。少なかった」「お齋の味が薄かった。濃かった」とか、そういうことに

関心が終始する。そして、「この講師の法話は分かり易かった。難しかった」だの、そういうところで終わっている自分がそこにあるということが、改めて問われるのです。

願われていることは

問いかけられているということ

「問い」ということについて、緊急事態の状況ではなくても、何時でも私たちは問われているのです。蓮如上人の『御文』をいただきますと、三帖目九通に、報恩講をお勤めする私たちの姿勢を、厳しく問うてくださっているお言葉があります。

年月日ごろ、わがこころのわろき迷心をひるがえして、たちまちに本願一実の他力信心にもとづかんひとは、真実に聖人の御意にあいかなうべし。これしかしながら、今日聖人の報恩謝徳の御こころざしにもあいそなわりつべきものなり。あなかしこ、あなかしこ。

（『真宗聖典』807頁）

「真実に聖人の御意にあいかなうべし」とあ

ります。親鸞聖人のお心は、「南無阿弥陀仏」の教えに出遇つて欲しいということでしょう。「南無阿弥陀仏」の教えに出遇うことが私たちに願われているのです。そして同時に、私たちがその願いを、報恩講において確かめ合つていくのです。そうすると、その願いに適うような生き方をしているかと、いつも私たちは問いかけてらるるのです。

この報恩講の『御文』のお言葉には願いがあります。經典の言葉も、親鸞聖人、蓮如上人のお言葉も、先達のお言葉も、私たちにとつてそれは語りかけです。その語りかけは、呼びかけでもあります。それは何を語りかけてくださっているかという、願いです。私たちが願われているのです。その願いに遇うということは、自分自身の在り方を見つめ、問い返していく。そういう世界をいただくのです。願われているのは同時に問いかけられています。ですから、毎年の報恩講が、自分にとつてどうなのかという問いを失うならば、それは形だけの報恩講になってしまうのでしよう。そこには、お勤めする人たちの願いも情熱も何も無いということになります。

報恩講にかかわらず、このコロナの状況の

中で、社会全般同じことが言えると思います。私たちが自身の生活は一体何だったのか。出来ることが出来なくなっている今、そして、社会状況が非常に不安定な中、人が人を非難したり、分断していくような現実が起こっています。私たちの生き方や在り方、社会の在り方はどうだったのかということが、今も問いかけてらるるのです。

問いを失って歩む私たち

ある高校の女子生徒の作った川柳が校内で最優秀賞を取ったということがニュースで紹介されていました。そして、選者の方が、この句は私たちの生活の根本的な問いなのだということを選評しておられました。どういう川柳かと言いますと、

本当の 当たり前前つて 何だろう

という一句でした。

自分が当たり前前に歩んできたその生活に、本当と言えるものがあつたのかということだと思ひます。いかがでしょうか。私たちの生活に、本当と言ひ切れるものがあるのか、ど

うかですね。

本当のものがわからないと
本当でないものを本当にする

という安田理深先生のお言葉がございすが、そういう意味で、何を本当として生きているのかということが、コロナを通して問われていることを、川柳にされたということ

す。そういうことを思ひますと、報恩講も当たり前に勤めてきたわけですが、では、その当たり前前に勤めてきたことが、本当はどうなのかということですか。何度も申し上げておりますが、本当に親鸞聖人のお心に適うような報恩講なのか。そして、またこの時代の中で私たちの在り方や生き方が、本当ということに適うような生き方をしているのかどうか。本当とは何なのか。どこかで私たちは問いを失つて歩んできたのではないかと。問いを失つて報恩講を勤めてきたのではないかと。そういう問いが私たちになければ、人間が考えていることが正しい、人間が思っている方向性が良いということになってしまいます。立ち止まつて、そこに問いが与えられていく。問いと

ということが私の中に起こってくるということ
が何より大切なのです。

けれども、普段の生活というのは、なかなか問いが生まれにくいですね。やはり、このような緊急事態下において、私たちの生活が揺るがされ、先行きが見えない時、そこには大きな喪失感、変わり目があります。その変わり目の一番象徴的なことは「死」です。ですからコロナ下においても、自らの命がそこに奪われるという恐ろしさが、他を攻撃することに転化するのではないか。そんなことを感じさせられます。

大きな変わり目の中で

報恩講は、親鸞聖人が亡くなられたことを機縁として勤められてきました。その大きな変わり目の中で、残された方々が改めて「自分たちも死んでいく身」「限られた命」であるということを教えられ、何を大事にして生きていくのかということが、同時に死ということから問いかけられたのでしょうか。そして、その中でお経の意に出遇う。「南無阿弥陀仏」の意に出遇うのです。それから通夜や葬儀、ご法事が勤められていく。その通夜も、葬儀

も、ご法事も何のためにあるのかということですね。そこには死を通して自分自身の生き方を確かめていくことが、「南無阿弥陀仏」から願われています。そのことに気づいていくための仏事です。当時、親鸞聖人の死に向き合った遺族や門弟の方々も、願いと問いが与えられていったのではないのでしょうか。そういう中で儀式が勤められ、それが報恩講という仏事になったのです。

親鸞聖人は幼少の頃に、母親を病で亡くしたと伝えられています。母を失うということは、幼少の親鸞聖人にとって非常に辛い出来事だったと思います。同時に、幼いながらも「人は死んでいく」という事実に触れて、生死無常ということを感じていらつしやったのではないのでしょうか。

そして、9歳の時に出家得度されますが、その背景には、日野一族の没落があります。その中で一家の離散があり、生きていく場所を失っていくわけです。そういう厳しい状況の中で、没落していく貴族の子が生き残っていく道として、出家がそこに用意されていたと言われています。もちろん、道を求めて出家されたとは伝えられているのですが、きっと生きていくために、周りの大人たちの計らい

で出家されたのではないかと思えます。幼少期の親鸞聖人自身は大きな変わり目の中を生きていかれたのです。深い悲しみや痛み、喪失感を伴った生活だったのではないのでしょうか。

そして、比叡山での20年間の修行生活の中で、お釈迦様の教えに学びながら、生きる道を求めての歩みがありました。しかし、比叡山での学びが、本当にお釈迦様のお心に適うような学びなのかどうか、という疑問が生じてくるのです。比叡山での仏教が、もう形だけになって違うものに変質してしまつて、そこにもう魅力が感じられない。信頼していた世界への失望と喪失。そういう中で親鸞聖人は、29歳の時に比叡山の仏教と訣別し、山を下りていかれたのです。そして、法然上人のもとで念仏の教えに出遇い、そのお心を求め、自分を超えた多くの仲間と僧伽が具現された吉水の道場で聞法されていたのです。しかし、当時の政治権力、南都北嶺の仏教教団によって弾圧を受け、吉水の念仏の道場は解散させられ、学んでいく場も奪われ、失われていく。法然上人をはじめ、仲間も死罪・流罪になり、大きな喪失感の中で、親鸞聖人は越後に流罪になっていかれたのです。



そして、40歳の時に流罪が許されるのですが、その時に師の法然上人が亡くなりました。法然上人の念仏の教えをもう二度と聞くことができない。そういう深い悲しみ、痛みがありました。けれども、そこから親鸞聖人は、それを機縁として『教行信証』を撰述していかれたのです。そして晩年には、関東のお弟子方に教えの受け止めの混乱があり、その中で長子である善鸞を義絶していかなければならないという現実がありました。でも、その事件によって親鸞聖人の信心の深まりにもなっていたのです。

親鸞聖人の90年のご生涯は、大きな変わり目を何度も迎えながら、そして、何度も大事なことを失っていくような人生を生きられたのです。その度に自分の生き方が、いつも問われながら歩んでおられたのではないか。そういう中で、「南無阿弥陀仏」のお言葉に出遇っていかれた親鸞聖人がいらつしやつたのではないか。ですから、いろいろな出来事の中でも、さまざまなき詰まりの中にあつたとしても、その度に親鸞聖人はいつも「南無阿弥陀仏」のお心に帰って、そこから厳しい現実を生きていかれたのではないかと思えます。それはきつと、人間として生きていくということの「はじめに帰る」ことだったのではないかと思います。

「正信偈」冒頭で「帰命無量寿如来」とあります。「帰命」は「帰る」。「南無阿弥陀仏」の「南無」も「帰命」ですから、「帰る」。阿弥陀に帰る。苦しみ悲しみの大きな変わり目の中で、「南無阿弥陀仏」に帰って、「南無阿弥陀仏」の本当に尊い世界に出遇う。ですから、今回の教区報恩講のテーマが「今、であらう」なのです。親鸞聖人のご生涯を通して、そこに私たち人間の「はじめ」、つまり原点・根本・根源がある。本当に尊い、本尊の

世界がある。そこに帰り出遇っていくということが願われているのです。

問いを回復する

真宗会館での報恩講はいつから始まったのかというところ、去年が真宗会館の設立から30年でした。私も当時、職員でおりましたので、昨日のように思い出されます。1989（平成元）年11月10日～11日に落慶記念式典が執り行われ、翌年の2月27日～28日に、初めて、真宗会館で東京教区の報恩講が勤められました。教区の方々の願いと情熱。そして、緊迫感の中での深い問いを持ちながら勤められた「はじめに帰る」報恩講だったと私の胸に刻まれています。

遡れば、1981（昭和56）年に東京都が東京本願寺（別院）離脱の申請を受理しました。宗派離脱になり、東京教区は大変混乱いたしました。もとより本山もそうですが、全国の真宗大谷派のお寺が教団問題の渦中、大きな混乱の中にあつたのです。その中で、東京教区の先輩たちは「これまでの真宗大谷派、教団、東京本願寺とは一体何だったのか」、「真宗寺院とは何なのか」ということが問われて

おられました。「本当の真宗寺院とは」「本当の真宗の僧侶とは」「本当の真宗門徒とは」ということが同朋会運動の展開の中で言われていたのですが、教団問題の危機的状况の中で改めて、一人ひとりの自らの立ち位置が問われたのです。



その時に、私たちの先輩たちは、混乱の中でどうして良いか、その方向性がなかなか見いだせない時に、「はじめに帰ろう」という歩みが生まれてきます。今まで教区報恩講という名称でお勤めされたことは無く、東京本願寺の報恩講に出仕、参詣、聴聞ということが、

東京教区の皆さんの姿だったようです。自分たちの別院が失われていくという未曾有の危機の中で、もう一度、親鸞聖人のもとに帰っていかねばいけないのだと。その帰っていく大切な事柄が報恩講だったのです。親鸞聖人に尋ねていかなくてはいけません。「南無阿彌陀仏」の教えに尋ねていこう。だから、報恩講を自分たちの手で勤めようということ、2年後の1983(昭和58)年に東京2組の坂東報恩寺で東京教区報恩講が初めて勤められていきました。

そのあとも毎年、坂東報恩寺でお勤めされ、そして、1990(平成2)年に、開館したばかりの真宗会館に移して勤められました。以来、毎年東京教区のお寺・ご門徒の方々、教務所・出張所の職員の手によって、御同朋・御同行の手によって報恩講が勤められたのです。感動的な感慨深い報恩講でした。

そして、その時に問われたことが、今も色褪せず継承されていることを強く思います。このコロナの状況の中で、その先輩たちの願いと、先輩たちが問われたことに、もう一度立ち帰っていく。「願いと問い」をもう一度、私たちの中に回復していく。それが報恩講をお勤めしていくということ、本当に大切な

ことではないかと改めて思わせていただいています。

出遇うべきものに 出遇って生きる

昨年(2021)の12月10日は、兄の7回目の祥月命日でした。私の実家の近くに住んでいる親しくしていたおばちゃんが、昨年の10月に100歳で亡くなりました。そのおばちゃんの子どもと兄が同級生でありました。兄が小学校3年生の時に、そのおばちゃんの子どもが事故で亡くなっておられます。その事故の時、私の兄ともう一人の友だちの3人で一緒に遊んでいたそうです。

兄の月命日の3日後が、おばちゃんの葬儀の日でした。その葬儀で、おばちゃんの子どもの死と重ねて思い返すことがありました。私の兄の葬儀で、兄の友だちが弔辞を読みました。その弔辞の最初にこういう言葉がありました。「小学校3年生の時のあの悲劇から私たちは歩んできました」と。私は弔辞を聞きながら驚きました。この人があの時のもう一人の友だちだったのです。

村で行われた結婚式を3人で見に行ったそ

うです。見ていたら、目の前に止まっていたタクシーがバックで急発進してきて、3人は急いで後ろに逃げたそうですが、後ろに深い溝があつて、2人はその溝を跳び越したのですが、もう一人は溝の下に降りたそうです。

そしたらそのままタクシーが溝の中に後ろから落ちてきて、その友だちは車の下敷きになつて亡くなったのです。それを2人は上から見ていたのです。友だちの死を目の当たりにして、小学校3年生からずっとそのことを胸に抱いて2人は生きてきたんだということをも思つた時、急に涙が溢れてきました。友としての深い絆があつたのでしょうか。きっと2人とも友の死という事実から、自分たちの生が、どこか問われながら生きてきたのではないかということをおもいました。

その後の弔辞はこのように続きました。「自分分は60年あまり生きてきて、それなりに団塊の世代として時代をリードしてきた。それなりに仕事をしてくいて、それなりに頑張ってきた。しかし、このままの状態です。生きてどうなのだろう。何かやり残したことがあるような気がしてならない。君はどうだったのだろうか。君はお寺の住職として生きてきたけれど、君の生き方を見ていると僕は非常に思うとこ

ろが多くある。君のような生き方を自分もしていかななくてはならないという気がしてならない」という弔辞でした。

これまで頑張つて生きてきたけれども、何が足らない。このまま自分が死んでいつてどうなんのだろう。出会うものに本当に出遇つて自分自身は死んでいききたいのだと、何かその人自身が、自分自身の人生そのものから願われ、問われている。そういうことをこの弔辞から感じたのです。

その後「正信偈」を皆んなでお勤めし「白骨の御文」の拝読がありました。

人間の浮生なる相を

つらつら観ずるに

『真宗聖典』842頁

とあります。「浮生」、それはどんなに一生懸命に生きてとしても、本当に大切なことがわからなければ、浮足立った生き方にしかなくていいのではないかと。そういう蓮如上人の問いかけです。同時に本当に地に足が着いた生き方をして欲しいという願いが、そこにかけられています。そういうことを、私たち

は大切な人を失った時、大きな壁にぶつかった時、或いは危機的状況の中で、生活そのものが閉塞していくような中で、「南無阿弥陀仏」から、私たちの生き方、生きる姿勢が問われていることを強く感じさせられます。

はじめに名号あり

先日、安田理深先生のご本を読んでおりました。その中で「はじめに名号あり」というご講義を聴聞された方が、「わからなくなったからはじめにかえる」という自らの言葉にして受け止めておられた文章も、合わせて掲載されてありました。

コロナ下での社会や一人ひとりの行き詰まりの中で、私たちの今までの価値観や、ものの見方、在り方では、その困難な状況を生きていくことが、なかなか難しい。ステイホームやリモートでの在宅の仕事の中で、孤立しやすい環境になり、その中でどう生きていけばいいのかわからなくなる。どうしたらいいのか、どこに自分の依つて立つ場を見いだしたら良いのか。

だから、改めて、生きているということの、存在のはじめに帰る、原点に帰るといふこと



が、実はその困難な状況から促されているのです。そして、私は私の思いを超えて、父と母の命をいただいで生まれてきた命です。自分の思いを超えて私はある。わからなくなったら、その私の命の、存在のはじめに帰る。そのことを「はじめに名号あり」という言葉で示してくださいるのでしよう。安田先生とその方の言葉をいただきながら、深く頷くものが私にありました。

名号は「南無阿弥陀仏」です。私たちが報恩講を通して、「南無阿弥陀仏」のお心に出遇わせていただく。親鸞聖人がいつもそこに帰り、そこから歩んでいかれたのです。私たちもまた、そこに帰っていかねばならない。そのことを示す言葉が「南無阿弥陀仏」。そこに人として生まれたことの意味が示されているのです。

2023年に「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」がございませす。「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」が法要のテーマであります。その「南無阿弥陀仏」に、私たちがもう一度帰っていかねばならない、「はじめに帰る」ということが、現在の状況の中で、改めて私たちに強く示されたテーマだと思います。

「南無阿弥陀仏」は本願の名号です。「南無阿弥陀仏」という名号は仏の願いなのです。その願いを伝えるために名があります。名に触れなければ願いに触れることができません。名という形、言葉がなければ、願いに触れることができないのです。だから「はじめに名号あり」と安田先生はおっしゃるのです。私たちは親から付けられた名以外に、存在

そのものを表す命の名を持って生きています。だから生まれ生きていることは、そこにすでに、願われて生まれ生きていることになりませす。私たちが「南無阿弥陀仏」と称えるところに、いつも「南無阿弥陀仏」の世界から願われているのです。そして同時に、私たちの在り方や生き方が、その願いから問われているのです。

名を通して 願いから問われる

誰でも生まれてくる時に名前が付けられます。生まれてくる時に最初に親から与えられるものが名前という言葉です。その言葉は、父の命と母の命をいただいて、生まれてくる命に、親がまず考え思うことは名前です。生まれてくる子に、どんな人間になって欲しいのか、どういうことを大事にして生きて欲しいのか、そういうことをまず考える。それが親という存在です。すべての人がそうだとはいえませんが、一般的に親の願いをもとに名が付けられます。そうすると私たちは、生まれる前に、すでに親に願われて生まれてくるのです。そして、自分に付けられた名、その

名には親の願いが込められ、その名の願いから問われる人生が始まるのです。誕生とは、自らの名を通して願いに出会い、そして、私の生き方そのものが問われるのです。また、名付けた親自身も、子の名前から問われることになるのです。だから私たちは、名を付けられた時から願われ問われた存在です。

しかし、必ずしも子に対する親の願いがあるとは言えない場合もあるし、親子のお互いの気持ちも変わっていく場合もあります。なぜなら人間の願いだからです。人間の願いは状況によって変わります。生まれてくる子どもが、周りから本当に祝福されて生まれてくるかという、決して皆んながそうだとは言えません。どんなに誕生を喜び愛した子どもであっても、成長する中で意見が合わなかったり、利害でトラブルがあると相反します。そして、支配的な親から抑圧されると、親を恨んだり、親が付けた名前です。私たちが願われ名前もあり得るわけです。私たちが願われ名前をいただいて生まれてくるということは、素晴らしくかけがえのないことですが、人間としての避けることのできない業を抱えることにもなります。

そして、先輩・親たちが生きてきた歴史を

生まれた時に、私たちは背負います。背負いたくなくても背負うことになります。生まれた時に、日本人としての名前を名乗ることは、日本の歴史を背負うことになるのです。そういう現実があります。それを「宿業」と言います。親鸞聖人の言葉を唯円が聞き取った『歎異抄』第十三条の中にあります。そして、その宿業は「善悪の宿業」とも記されています。

その時々善し悪しの価値観が、その時代を作ってきました。今でいえば経済中心の世の中でしょう。そして、生育期の環境です。その環境の善悪価値観の中で、否応なく私たちはその色に染まっていきます。そうして名前は、時代社会のこれまでの歴史の歩みと、善悪の価値観を背負うことになるのです。ですから、名前は大事なのですが、そういう一面もあるのです。

それが私たち人間の願いです。善悪という思いの中の願いです。私が人として生まれてくるということは、本当は善悪を超えています。善悪を超えた命をいただき、私を超えた願いを胸に生まれてくるのです。そのいのちが「南無阿弥陀仏」という名号で表されています。

いのちの原点 「南無阿弥陀仏」に帰る

私たちは生まれてくる時に、先にも触れたように、もう一つ、名付けられた名前があります。そのことを示している経典が『大無量寿経』です。お釈迦様の出遇った世界がここにあります。「願いと問い」との出遇いです。それを知らしめる言葉が「南無阿弥陀仏」なのです。

私たちは、母親の温かい体内で人となつていきます。柔らかさと、明るさと、豊かさと、安らぎ。そして、守られている、温かい眼差しで見つめられ、支えられているという、この身に培われる居場所と尊厳という感覚。そういうことが私たちの本能として、人間という存在の本来の感覚として備わっていくのでしょう。ここに私たちの「存在のはじまり」があり、これが人間の原点なのです。

そして、産声をあげて産まれてくると、生まれたその境遇の中で生きることになります。生育の環境や時代社会のさまざまな価値観に晒されて生きていかなければならない。また自己中心の自我の心も芽生え、その状況に自分自身も染まってしまふ。そういう中で、人

間の本来、私の本来としての、この身の中にある柔らかさとか、安らぎとか、明るさとか、豊かさとか、つながりの温かさということがどこかで薄れ、培ってきたはずの人間としての感覚を忘れてしまう現実があるのでしょうか。だから私たちは苦しみ悩む存在です。本当に安らげる居場所を無意識に求めながら生きているのです。しかし、なかなか得られないで傷つけてしまう。時には自分自身が周りの人を傷つけてしまう。でも、そういう存在だからこそ、私たちは人間の本来に帰ることが願われているのです。それは人間そのものの、根源からの、原点からの願いと問いかけです。それが「南無阿弥陀仏」の言葉に託されて私たちに与えられているのです。ですから、わからなくなったら「はじめに帰る」、「南無阿弥陀仏」に帰るということを、ここに示してくださいました。

親鸞聖人から待たれている、今

皆さんの目の前の真宗会館のお荘厳に、その世界が表現されています。真宗大谷派のお荘厳の基本の色は、赤、黒、金です。その色が「南無阿弥陀仏」の教えを表しています。

それは「歸命無量寿如来 南無不思議光」という言葉で具体的に示してあります。要約すれば、「無量寿」という寿。「南無不思議光」という光。寿はいのち、存在ということ。光は輝きを表す言葉。「南無阿弥陀仏」の意味がここにあります。一人ひとりの存在が、かけがえがないということ、ここに表現してあります。黒色は大地。いのちを生み出すはたらきそのもの。そこから私として生まれてきたこのいのち、存在、それを赤色で表し、その一人ひとり、皆んな輝いた存在ということが金色です。それが私たちのいのちのはじまりであり、存在の原点です。私たちはそのことを失って生きているのではないか。そういう問いさえも失っているのではないか。でも、そんな現実があるからこそ、「南無阿弥陀仏」の教えがあるのです。

慶讃法要のテーマが「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」です。人として生まれてきたことが、どういう意味を持つているのか。「失う」という厳しい生活状況、その苦しみの中から出てくる、普遍的な問い。なぜ生まれてきたのか、なぜ生きているのかという問い。そこに「はじめに帰る」、「南無阿弥陀仏」に帰るというテーマの意味

するところがあるのではないかと思います。最後に申し上げます。今、私たちは親鸞聖人の「南無阿弥陀仏」の精神に改めて立ち帰る。それが私たちがはじまり、原点です。その精神の願いと問いに絶え間なく「今、であう」ということが、私たち一人ひとりに親鸞聖人から待たれているのです。コロナ下の中、真宗会館設立後の東京教区の新しい歩みの最初の教化テーマ「浄土をあきらかにする」を胸にお話しさせていただきました。





教区報恩講を各地でオンライン参拝

今号では、教区報恩講がオンラインで厳修されることに伴い、教区内各地で、オンライン配信を、門徒と共に視聴、参拝された寺院を取材いたしました。

今回、取材にご協力いただきました寺院は、東京8組 浄行寺、千葉組 勝善寺、山梨組 佛念寺です。取材にあたり、緊急事態宣言発出中のため、編集員が現地に向くのではなく、テレビ電話等を利用し、オンラインで取材させていただきました。

今回、取材にご協力いただきました寺院におかれましては、お忙しい中、取材にご協力いただきましたことに御礼申し上げます。

教区報恩講の様子は「暮らしにじいーん」報恩講ページにてご視聴いただけます。



南無阿弥陀仏
人と生まれたことの
意味をたずねていこう

<http://www.ji-n.net/gyoji/houonkou.html>

東京8組 浄行寺



写真中央：ハンチング帽をかぶった岡野さん。皆さんでモニターを囲んで談笑をされている様子。

岡野哲郎さん 日頃からYouTubeを活用して浄土真宗の法話や法要を視聴していますが、やはり本堂で住職のお勤めやお話を生なまで聞くのでは大きく違いますね。年寄りの感覚かもしれません、顔を見合わせることによって相手のことがよくわかる気がしますし、こころの温かみを感じます。

また来年以降、真宗会館で参詣できるようにになりましたら是非とも足を運ばせていただきたいと思っています。



Zoomでのオンライン取材を受けて下さっている江川さん。

江川雅介さん 真宗会館に向かうとなると少し大変な面がありますが、オンラインでしたら比較的に参加しやすいと感じる方も中にはいらっしゃるのではないかと思います。私も現在90歳を超えて中々軽快に足を動かすことが難しくなりましたので、今回のようなオンラインでの配信がありますと、自宅からでも参加出来て大変助かります。

配信環境が整っておいりましたので、海先生のご法話も身近に感じることが出来ました。

五島住職 本堂にインターネット環境がなかったのですが、当初はどうしようか悩んでおりました。ですが、今年の元旦の修正しゆしやうえ会をどうし

ても、その時間にお届けしたいという気持ちがあり、浄行寺では本堂でライブ配信ができる環境を何度も試行錯誤を重ねながら整えておりました。苦勞がありました。その時の試みがあったので、本日、滞りなく門徒さん方と一緒にオンライン配信を視聴することが出来ました。

配信中はその時感じた素朴な疑問を、その場で門徒さん方が私に投げかけてくださいます。そこが例年の東京教区報恩講とはどこか違う、オンラインならではの新しい形で面白い部分であると感じました。

所感

浄行寺ではオンライン配信の休憩時間に、本山の報恩講でお勤めされる「坂東節ばんとうがし」の動画をYouTubeで視聴されました。その皆さんの姿がどこか新鮮でとても素敵でした。配信中に感じた素朴な疑問を住職に伺いながら視聴できるのも、東京教区報恩講の新しい形なのかもしれません。今回取材を引き受けて下さった五島住職、並びに浄行寺ご門徒の皆様本当に有り難うございました。

(取材／内藤 友樹・渡邊 尚康)

千葉組 勝善寺

7名の参加者の中で最年長の谷英郎たにひさおさんは、現在90歳。「私はコロナ禍になつてからZoomやYouTubeを使っていますが、非常に便利です。家にいながら法話を聞けますし、特に若い人に教えを伝えていくためには、お寺においてインターネットの活用を検討してほしい」との若々しいご提言をいただきました。

昨年、お連れ合いを亡くされた谷さんは、「今日まで生きてきた中で、多くの『変わり目』があり、行き詰まることも度々ありました。その時に、本日のお話の『原点に帰る』ということが、非常に重要であつたと思います」と述べておられました。

渡邊秀子わたなべひでこさんは、これまでに何度も海先生のご法話に遇つてくれました。「先生は常に『教えは問いかけ』だと仰つてくださいます。



谷さん



渡邊さん



井上住職：真宗会館へご門徒さんと車で報恩講に参拝されたときは、車内が「座談の場」のようでしたと語る。

問われることが無かつたら、自分の思いだけで生きてしまう私。だからこそ、『これいいのか?』『本当に大事なことは何だろうか?』という問いを、生きていく上での土台にして、そこから始まつていくことが大切なのだ、改めて感じています」と語られました。

また、「法話の内容が自分の生活にどう関わつて来るのか、正直よくわからない」というご門徒さんの率直な感想に対し、井上住職は「わからないということが実は大事なところ。それを課題にして、また一緒に聞法して参りましょう」と、やわらかくお応えになつていたのが印象的でした。

井上住職は最後に「海先生が仰つていたように、このコロナ禍という状況も『再出発の機縁』になります。『顔を洗つて出直しだ!』という、近田昭夫先生のお言葉もあります。そういうった色々な方々の教えの中に育てられ

て、まさに出発点としての『今』をいただいている訳です。本日お集りの方々は、勝善寺の『宝』です。三宝における僧伽です。この先、みなさんが核となつて、新しい時代にどういう寺が良いのかということをも、ご意見いただきながら住職として動いていこうと思つております」と挨拶されました。この締めくくりのご挨拶はもちろん、ご門徒さんの真摯な聴聞の姿勢に、取材に当たつていた私たちも編集員という立場を超え、改めて報恩講に遇うことの意味を自身の上に確かめさせていただくことが出来ました。

(取材/田宮真人・中村晃)



会場となった本堂には、オンラインの法座ではなかなか実現出来ないういた、座談会のような雰囲気生まれ、参加した方々は積極的に発言していた。

山梨組 佛念寺

山梨組の佛念寺では住職と坊守、金丸悦子さん(本願寺派法蔵寺所属)、中沢清子さん(山梨組慶専寺所属)の4人でオンライン配信を視聴されていました。

Q コロナ禍における佛念寺さんの現状を教えてください

藤谷住職 佛念寺の報恩講は11月上旬に行いました。開催の判断については悩みましたが、状況が悪くならない限りは大事な仏事を何とかお勤めしたいと考えていました。体調面や感染に不安を感じる方もいたようで、例年に比べると少し参詣者が減りました。

普段の法事を行う際に気を付けているのは、入口でのアルコール消毒やマスク着用などの呼びかけ、本堂では密を避けるように離れて座って頂くこと、特に換気を怠らないようにしています。また、施主のあいさつを食事の時にすることが多かったのですが、最近は開式の際に感話のようにお話しして頂く形にしています。施主やご家族が故人との思い出等を言葉にすることで、自ずと「故人との関係性」

や「自分にとって法事とはどういう意味なのか」といったことを考えて頂くきっかけになっています。

Q 金丸さんと中沢さんは佛念寺所属の門徒さんではありませんが、今回どういったご縁があつて佛念寺さんで視聴されましたか？

金丸さん 所属するお寺とは、葬儀や法事のお付き合いです。このような中で佛念寺さんにご縁があつたのは、私の実家が犬谷派であること、甲府別院で藤谷住職にお会いして、同朋会をやっているのを知ったので、毎月参加させてもらっています。同朋会で今回のオンライン配信をする事を聞いたので参加しました。佛念寺さんでやっている行事には都合をつけて、ほとんど参加させてもらっています。

中沢さん 金丸さんと同じく、佛念寺さんの同朋会でご一緒させて頂いています。甲府別院で毎月行われている「御命日のつどい」に金丸さんとご一緒にお参りしており、藤谷住職にお会いして、同朋会で勉強させて頂いています。私も同朋会でオンライン配信をされると聞いたので、今後のために自分もパソコンを持参して一緒にお参りできました。

Q 今までに教区報恩講にお越しになった事はありませんか？また今回のオンライン法要についてどう思いましたか？

中沢さん 昨年は同朋会の皆さんと真宗会館へ参詣させて頂きましたが、その後はコロナ禍の影響で数カ月お会いできませんでした。今回はオンライン配信でしたが、昨年について海先生のとて面白いお話を聞きました。

金丸さん 教区報恩講には何度か参詣していて、身体が融通するときは日曜礼拝へも参らせて頂いています。今日の海先生のお話では、「どうしようもなく、もう行き詰まったら最初に帰る」という言葉をとてもありがたく頂きました。(取材/平松 正宣・佐々木 誠信)



佛念寺のオンライン配信視聴の様子

オンライン報恩講を終えて

報恩講企画会 平松 敬子（東京4組 専行寺）



2021年の教区報恩講は、YouTube によるライブ配信で、各寺院・各家庭での厳修となりました。企画会では当初、例年通りの法要形態で準備を進めてきましたが、新型コロナウイルス感染拡大のため、人との物理的な接触を避けつつも連帯していく（密を避けつつも出会う）という相反する形を模索しなければなりません。真宗会館への参拝は代表者のみでソーシャルスタンスを取り、発声も控えていただくリアル参拝と、オンライン参拝という新しい仏法聴聞のスタイルと

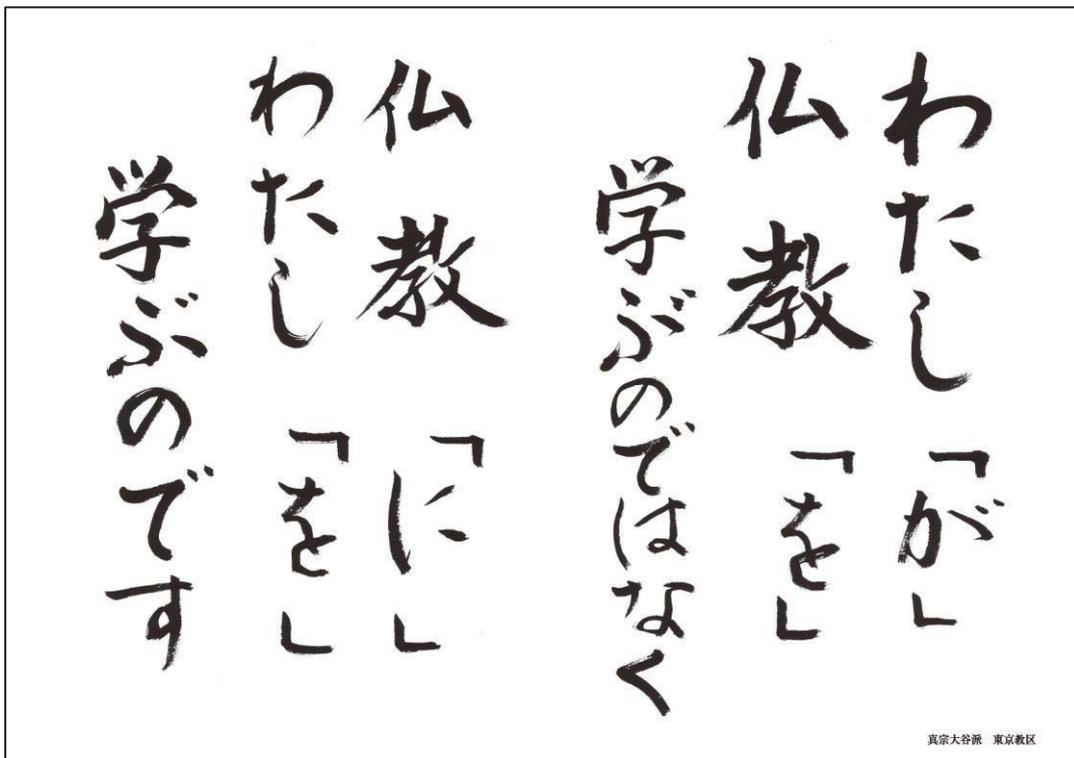
なりました。実際に足を運ばなくても多くの方に参拝していただける利点もありましたが、同じ場につどい、手を合わせ、お念仏を称えることがかなわなかったことは、どうしても寂しい思いが致しました。

東京教区の寺院数は約480カ寺。今年もオンライン配信のため、全国の大谷派寺院約8700カ寺にもご案内が配布されました。どれだけの方が参拝してくださるのか楽しみにしていましたが、法要当日のオンライン最大視聴者数は262人だったと聞き、正直なところ落胆しました。自坊の報恩講でも参拝者数が気になってしまいう自分を含め、私たちの報恩講に対する姿勢や想いが問われている数字ではないかと、改めて強く感じています。コロナ禍の現在、自坊においても定例行事や法話会などのオンライン配信を試行していますが、これまで寺の行事に参拝する機会がなかった方のご参加は大変嬉しいことです。

また、体調の問題や介護・育児などで寺まで出かけられない方々にも参拝いただける可能性があります。オンライン化は私たちの生活が変化していく大切なきっかけに違いありません。しかし、私自身もパソコンに不慣れで、「人と話す時は対面」という固定観念にとらわれており、第2回からオンラインとなった企画会議さえもストレスに感じました。今後はインターネット環境が整っていない方々、パソコンやスマートフォンなどの使用が苦手な方々へのフォローが、とても大きな課題だと痛感しています。そして大切な「法要」を、画面を通しての「法要鑑賞会」にしてしまっていないか、また「寄り合い談合」の大切さ、重みが失われていく危うさはないのかとも考えさせられます。

新型コロナウイルスは、私たち人間がつながりなしでは生きていけないことをはっきり知らせてくれたのではないのでしょうか。感染がいつ終息するかわからない不安を抱えたままですが、人と人とのつながりを大切に、法話や感話をみんなで味わい、心ゆくまで語りうことのできる教区報恩講を来年に向けて創造していきたいと念じています。

今月の法語



書：佐藤 多仙

- ・頒布中「掲示伝道用ポスター」(A2 サイズ)
「掲示伝道ポスターミニ」(ポストカードサイズ)
- ・「掲示伝道用ポスター」が貼れる門徒宅用掲示板を無償設置いたします。
詳細は東京教務所まで。

web会議ツール
Zoom 用

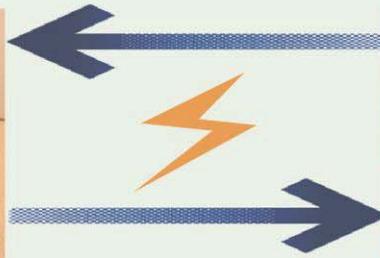
オンライン マニュアル

主催者編
&
参加者編

新型コロナウイルス感染拡大を受けて、オンライン法座を検討されている方々への一助となるよう、東京教区では web 会議ツール「Zoom」用のオンラインマニュアルを作成しました。

ダウンロードしての印刷・配布はもちろん、独自に文字等を変更することも可能です。

どうぞ下記、東京教区ホームページよりダウンロードしてご活用ください。



真宗大谷派東京教区ホームページ（暮らしにじいん）
<http://www.ji-n.net> にてダウンロードできます。

※web版は随時バージョンアップし、アップロードしていきます。

問い合わせ先 東京教務所（佐々木・渡邊 楽）

真宗会館30周年 記念式典

総合調整総務会 幹事 白山 勝久

2021年1月29日、真宗会館設立30周年記念式典が緊急事態宣言発出中の状況に鑑み、教区内役職者に絞って開催された。

開式に当たり、但馬弘宗務総長、渡辺智香東京教区教区会議長の挨拶があり、大谷暢裕門首、大谷裕新門より祝辞をいただいた。式典では、二階堂行壽氏（東京4組専福寺・首都圏教化推進本部本部長）と本田彰一氏（東京1組本明寺・東京教区教化委員）より課題提起がなされた後、大谷大学学長の木越康氏より『「首都圏の教化」を考える―The Homeless Mind―』の講題で記念講演をいただいた。

課題提起と記念公演は文章として起こされるそうなので、詳しくは是非そちらをお読みいただきたい。

ここからは白山の所感を綴る。真宗会館の設立は、東京本願寺の離脱問題と切り離して

考えることはできない。離脱をした寺院（僧侶）に、「なぜ離脱を？」と問うことはあっても、大谷派に残る者が「なぜ大谷派に身を置いている？」と問うことはあまりない。二階堂氏は、自身への問いとして「なぜ大谷派に？」と語られたのだと思うが、やはり私自身の問いとして受け止めるべき言葉である。

真宗会館設立の願いは、サンガの確かめでもあった。真宗門徒としての自覚があったか。門徒との交わりがなされていたか。当時の課題ではなく、今もなお続く課題である。

首都圏教化推進本部と教区教化委員会。双方に積極的に関わる本田彰一氏は、ふたつの組織があることの齟齬や疑問を感じられていた。そのような中、「親鸞講座」で聴聞される方の姿を通し、講座は教化だけの場ではなく出会いの場であることを教えられる。共に聞法し、歩みを進めるためにある場であると転じられた。ふたつの組織があるのではなく、

南無阿弥陀仏を要として、本部は教区を引っ張り、教区は本部を引っ張り、共に歩み進めてゆくと思い至った。人と人との距離は、距離をとりながら関係を築いていくのではなく、聞法を通して距離が縮まっていくものであると、課題提起から聞こえてきた。

両者の課題提起から、「門徒との対話」というキーワードが聞こえてきたが、木越康氏もまた「親鸞自身も対話の人であった」と語られた。教化というと、発信する側と受信する側、教える側と聞く側という関係性を想うが、その思いが、寺院と門徒とのリンクを阻んできたのではないか。発信側から受信側へという発想ではなく、「まずはお話を聞き出すこと！ 悩みの場に身を同じくすること」と、対話が要であることを語られた。

新型コロナウイルスが拡散し始めて1年を超えた。今後の教化、寺院のあり方について考える方は多いことと思う。けれど、この1年の間、門徒の声を聞いてきただろうか、安否を気遣うやりとりをしただろうか。この1年ほどの歩みの中に、これからの寺院のあり方が凝縮されていると考える。

教区教化通信 「同和」協議会

『現代語 唯信鈔文意』に対する東京教区「同和」協議会からの意見書 ②

「同和」協議会 常任委員 井上 英実

※3月号の続き※

もう一点、『現代語 唯信鈔文意』159頁「教えに触れる」の発言について意見を述べました。

C▼「いし・かわら・つぶての」とくなるわれらなり」という箇所ですが、ここはともすると社会階層論として使われがちです。これら石、瓦、礫に取るに足らないものという意味があるために、社会的に蔑まれている人、あるいはそれらの人びとを支援する人たちが、「親鸞はこう言っているじゃないか!」と、社会に訴えることがあります。同様の記述は289頁にもあり、さらに「この言葉を利用する人にとって、『われら』に自分が含まれていないのですね」とあります。このような批評は中世の社会・宗教の状況を無視していることと、現代社会で部落差別を克服しようとする運動や、様々の模索についての無知と無理解、中傷であると読み取れ

るので、この点についても見解を質しました。

— 2 「同和」協議会の見解 —

現在大きな課題となっている「是旃陀羅」問題への取り組みにおいては『われら』の地平」が重要なキーワードとなっています。「部落差別問題等に関する教学委員会 報告書」においても「2. 教学の課題(1) 『われら』の地平」と題し、「屠沽の下類」「いし・かわら・つぶて」の類比の上で「その存在を『われら』と領いた親鸞聖人」である、と「屠沽の下類」を重視しています。

一方、「同和」協議会が問題提起した『現代語 唯信鈔文意』第十五章「教えに触れる」には『われら』という地平」とサブタイトルが掲げられていますが、「屠沽の下類」とされる被差別民・「賤民」・「悪人(聞持記)」についての注意の払い方に大きな差があると考えま

す。砂川先生もこのような点で納得がいかなかったものと思います。

東京教区「同和」協議会は以前から中世の社会・「賤民」史、宗教の状況、文化を学習してその中を生きた親鸞の思想を確かめようとしてきました。それによって現在の部落差別に対して真宗教団がどのように向き合っているのかを考えるためです。そうした観点から親鸞仏教センターに問題提起を続けてきました。『親鸞仏教センター通信』75号「あとがき」に「東京教区「同和」協議会から提出された意見書」とは、こうした事情で出されたものです。

親鸞仏教センターでは「親鸞と中世被差別民に関する研究会」が発足しました。『現代語 唯信鈔文意』について問題提起された点については研究成果を踏まえつつ機関誌等に発表される、とのことでした。

なお、砂川先生から問題点の指摘を受けた2018年度「第2回部落問題基礎講座」に参加していた藤井学昭宗議会議員が、昨年の宗議会においてこの件について質問をされました。質問と三品・望月両参務の答弁は宗派機関紙『真宗』2020年9月号に掲載されており、ご一読ください。

私が出遇った言葉

湘南組 長徳寺 内藤 望



生命は生きています。

しかし“いのち”が生きられない。

2月の特別講義は岸上仁氏(脳神経内科 医・大阪教区受念寺)よりお話を頂いた。岸上氏はALS(筋萎縮側索硬化症)の患者さんとの出会いを通しての問いをお話しくださった。

ALSとは「存じの方もあるだろうが、全身の筋肉が少しずつ動かなくなっていく、やがて全てが動かなくなってしまう難病である。呼吸器をつけば、延命をすることはできて、動かせる筋肉があるうちは、そこに装置を装着すればパソコンを介して意思の伝達ができるが、無くなれば出来なくなってしまう。

そのパソコンのディスプレイにある時こ

う書かれていたことがあるそうだ。

「死にたい」

その気持ちの中身はなんであろうか。身体的な問題、精神的な問題、経済や介護などの社会的な問題。しかし、ほんとうの問題は何か。

それは、「生きる意味」「生きる喜び」を失うということ。老・病・死の苦悩、身体的な機能を失うというだけではなく、「死にたい」という声の奥にある苦悩は、今まで喜びだと思ってきたものに信頼が置けなくなるとのこと。「生きる喜び」「生きる意味」を失うということは喜ぶことも悲しむこともできなくなるような、人生の根本的な問題です。人間には、「生命」は生きていのに、生きる意

味を失うと“いのち”が生きられなくなるということが起こる。そのように、岸上氏からご指摘を頂いた。

自坊の隣町に座間がある。SNSで「死にたい」と言う人に声をかけ、9人を殺害した事件があった。「生命は生きています。しかし“いのち”が生きられない」という言葉を聞いたとき、その事件のことを思い出した。殺されたといった方々はきつとこういう気持ちだったのだろう。「死にたい」は、本当は「生きたい。しかし今が生きられない」、「何を信頼していいかわからない」ということだったのだろうと感じた。

今回の講義で、「生命は生きています。しかし“いのち”が生きられない」という言葉から、とても大事な視点を頂いた。

第20回 教学館月例研修会(オンライン開催)

2021年2月5日

基調講義：お休み

特別講義：「暗闇の中を生きられるのか

— 医療現場の問いを抱えて

仏教に学ぶ」

岸上仁氏(脳神経内科医・

大阪教区受念寺)



素直にありがとうを受け取る

れんげ保育園は、茨城県北部に位置する日立市にあります。太平洋に面し自然豊かな山に囲まれたまちです。

今年、保育士10年目になり、主任補佐として不安もある中、職員を含め、他の先生方の存在に支えられていました。



そんなある日のことです。先輩保育士に何気ない保育に関する報告をすると、些細な事にも関わらず『ありがとう』と返事を返してくれたのです。その時に私は心の中で『たいした事じゃないのに「ありがとう」なんておおげさ』と思ってしまいました。

今から8年前の話です。私の祖母が亡くなり、知人の方に『最近お婆さんが亡くなったのではないかと』声を掛けられました。知人は亡くなった祖母が私に祖母が伝えたい『素直になりなさい』という言葉に代弁してくれました。相手に対しても自分に対しても素直になれずにいた私に響くメッセージでした。

今回の先輩保育士に対しても、感謝の気持ちを素直に受け入れない自分自身に、祖母の言葉で気が付く事が出来たのです。

『ありがとう』を素直に受け取るという事は、ありがとうと素直に伝える事よりもっと難しい事なのではないでしょうか。なぜなら自分自身に対する決めつけと自信のなさが隠れているからです。自分の社会的な行動の価値は測れるものではありませんが、相手にとっては助かっているのだから…と素直に相手のありがとうに感謝しなければなりません。

この事から私は祖母に、「素直にありがとうを受け取る」ことの大切さを教えてもらいました。そして相手の『ありがとう』を心から信じる事、『ありがとう』という言葉がかけられて、素直に喜びや幸せを感じられるようになる事が自分自身の自信にもつながっていくのではないかと思います。

そして私は、子ども達の成長を援助するにはどんな事が大切なのか、子ども達と一緒に喜びや悲しさを感じて共に成長し、素直にありがとうを受け取れる私になりたいと思いました。

社会福祉法人 聖徳福祉会
れんげ保育園
(日立市)
主任補佐 益子 愛



あなたのお寺をサポートします!!

東京教区サポートプラン事業のご案内

同朋の会結成 サポートプラン



お寺の子ども会 サポートプラン



東京教区では上記、お寺のサポートプラン事業を行っています。新しく同朋の会、子ども会を始めたいと思っている。これまでの会をさらに充実させたいと思っている。そのようなご寺院に担当スタッフが伺い、それぞれのご寺院に合った会の形を一緒に考えていきます。まずは、東京教務所（担当：佐々木）までお気軽にお問い合わせください。

教区の情報をおあなたに あなたの声を教区に!!

一緒にネットワーク9を作りませんか？

編集員募集中!!

Network9

東京教区教化委員会報 ネットワークナイン

取材、原稿執筆、校正、デザインなど、紙面作りに関するすべてを行います。お寺の新聞やチラシを作る時のスキルも学べるかもしれません。パソコン初心者の方でも大歓迎です。先輩編集員が丁寧にご指導します。一緒に楽しいネットワーク9を作っていきましょう。

興味がある方、お問合せは東京教務所（担当：佐々木）まで

ネットワーク9へのご意見・ご感想をお寄せください
〒177-0032 東京都練馬区谷原1-3-7 東本願寺真宗会館内 東京教務所
【電話】(03)5393-0810 【ファックス】(03)5393-0814
【mail】nw9@ji-n.net



都市教化の扉



首都圏
教化推進本部

東本願寺「真宗会館」30周年記念式典 開催

真宗会館は、「首都圏に念仏の道場を」との願いのもと、東京教区と宗派が一体となり、1989年に設立されました。それから30年、いま改めて真宗会館の歩みを確かめるとともに、さらなる一步を踏み出すため、去る1月29日、東京教区と首都圏教化推進本部の共催による「東本願寺真宗会館設立30周年記念式典」を開催いたしました。

この節目をどのような形で迎え、また、今後どのように歩んでいくのか。新型コロナウイルス感染症による先行きの見えない中で、式典の企画立案は非常に困難なものでありましたが、教区会及び教区門徒会、教区教化委員会にも協力を仰ぎながら、昨年10月、基本計画の立案に至りました。

現下の状況にあつて、基本計画では、参列のご案内を教区内の各役職者及び首都圏教化推進本部の関係者に限定し、教区内の皆様にはYouTube配信することとしました。そ



大谷 暢裕 門首（しんらん交流館）

の後の緊急事態宣言の再発出により、さらに各役職の代表者に限定したご案内となりましたが、当日は教区から渡辺智香教区会議長、荒川縁教区坊守会長、白山勝久教区教化委員会総合調整総務会幹事の3名にご参列をいただき、他の役職者の方々もオンラインにてご参加いただきました。

また、宗務所（しんらん交流館）とオンラインで中継を結び、大谷暢裕門首をはじめ、大谷裕新門、但馬弘宗務総長にご参列を賜り、記念講演の講師である木越康大谷大学学長と首都圏教化推進本部・藤井宣行本部長も宗務所よりご出席いただきました。



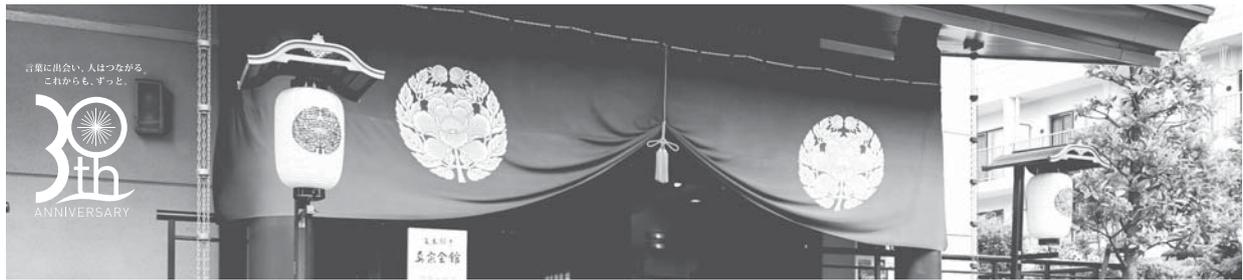
渡辺 智香 東京教区教区会議長
(真宗会館)



但馬 弘 宗務総長（しんらん交流館）



大谷 裕 新門（しんらん交流館）



式典では、門首並びに新門の祝辞と宗務総長の挨拶に続き、渡辺教区会議長に挨拶をいただきました。また、記念講演に先立って、二階堂行壽氏（東京4組）と本田彰一氏（東京1組）より、それぞれ課題提起をいただきました。二階堂氏より東京本願寺の宗派離脱という逆縁のなかで真宗会館が設立を迎えた背景を確かめる提起がなされ、本田氏からは自身が都市教化との関わりの中で出会い、気づいたことについてお聞かせいただきました。

そして、記念講演では木越学長より「故郷の喪失」という言葉を手掛かりとして、現代を生きる私たちの抱える不安の本質と、その不安に寄り添う寺院の在り方について、重要なご示唆をいただきました。記念講演や2名の提起などについては、冊子化のうえ、東京教区内へ配布させていただきます。



大谷大学・木越学長による記念講演（しんらん交流館）
（上）本田 彰一氏（真宗会館）
（下）二階堂行壽氏（真宗会館）

新型コロナウイルスにより、先の20周年のように教区の皆さまのご参集のもと式典が行えず、真宗会館の歩みについて皆さまのお話を伺い、大いに語り合う場を持つことができなかったのは、誠に残念でなりません。しかし、このような状況であっても、東京教区の皆様のご理解とご協力によって式典が執り行われ、新たな示唆を頂戴できましたことに御礼を申し上げます、第一報とさせていただきます。

東本願寺真宗会館
みんなの
ヨリドコロ
プロジェクト
Minnano Yoridokoro Project

プロジェクトやイベント詳細は特設サイトへ

当日のLive配信
「真宗会館設立三十周年記念式典」
はYouTubeのアーカイブからご覧
いただけます。

パソコンの方は
教区HP「暮らしにじいん」より/
スマートフォンの方は
QRコードを読み取り/

はい！こちら真宗会館です

駐	在
日	記



駐在からひとこと

写真：真宗会館探訪！「1階ベランダ」

東京教区駐在教導

佐々木 弘明

「場の記憶」

この一年余り、公共交通機関を使用
しての移動を控えていたが、所用があ
り、久しぶりに真宗会館前のバス停か
ら西武バスで練馬駅まで向かった。

バスに乗って、外を眺めていると、こ
れまで何十回も通った道のりのはずな
のに、新鮮さを感じた。

なぜ新鮮さを感じたのだろうか、と
考えてみると、久々にゆっくりと街の
景観を見ていたからなのか、新しい建
物ができていたからなのか、コロナ禍
で自分の心が落ち込んでいたからなの
か、と様々な理由が浮かんできた。

過去に何度も通った道や場所に久々
に行くと、「ハッ」とさせられることが
ある。この文章を書いていて思い出し
たことがある。それは、教区の研修会
「伝道講習会」（本年は5月開催予定）
で、群馬県にある沢渡温泉に行ったと
きのことである。研修会の日程を過ご
していたときに、私の中にふと過去の

記憶がよみがえってきた。小学生の頃、
沢渡温泉にあるリハビリの施設に、叔母
のお見舞いに家族で何度も来たことが
あったことが思い起こされた。それと同
時に叔母の姿、顔、言葉が思い起こされ
る。

日常生活の中では忘れてしまってい
るが、その場所に身をおくと、「場の記
憶」から様々なことがよみがえってくる
ことがある。それは、この場所で何をし
たのかということだけではなく、そこに
誰と行って、誰と出会い、何を思い、何
を感じたのかということまで、思い起こ
させてくれる。

「場」が、自分の奥底にあった記憶や
思いを掘り起こし、今の私と過去の私を
出会いなおさせてくれるのではないか
と思う。それが、今回感じた新鮮さにつ
ながったのではないだろうか。

自分の奥底にしまわれてしまった思
いを、「場」が記憶してくれていると感
じている。

はい！こちら真宗会館です



首都圏教化推進本部
推進要員
藤井 晃世

担当：真宗会館部門業務全般
今一番したいこと：旅行



私：「こんにちは。
本日はよろしくお願ひします」
相手：「よろしくお願ひします」
私：「音声、大丈夫そうですね。……
それでは、本日は〇〇さんの
四十九日を……」

モニター越しに、ぎこちない会話からスタートして、モニター越しの視線を感じて、振り返って、モニター越しに法話をする。違和感を払拭できることなく、1時間が終わって行ってしまった。そして、そこには誰もいない。

「日曜礼拝」も「お盆」も「お彼岸」も「講座」も「定例の聞法会」も「打合せ」も、ネットをつなぐ。そうしないと仕事にならない。

「オンライン」という5文字。この1年、何かにつけて入力をした5文字。この5文字をつけるだけで、コロナ禍でも「できている」気にさせてしまう。

今までも“ネット”を使っていた。ネットで調べて、ネット戦略なるものを学び、ネットでお知らせをして、SNSと追いかけて。通勤中もネットで暇潰し。そう、ネットに浸りきってきた。でも、こんな状況になって、浸りきっていたネットに疲れ果てた。

膝を突き合わせる事が、すべてだとは思わない。ただ、“場の空気感”や、文字にならない“間”の大切さを本当に知った1年。あの“場”とその“間”に苛立ちと歯痒さを抱いていたのに、今はそれが無いことに歯痒さを覚え、掴もうとしても掴もうしても先に逃げていく“ネット民”に、翻弄され続けている毎日が終わらない。

そんな中、コロナ禍で一番心残りなことがある。1年経ってもなお、祖母の死に、未だに“あう”ことができていない。

人事異動



退職



東京教務所教区雇員

浮葉 貴大 (うきは たかひろ)

(2021年3月10日付)

2016年3月から5年間に亘り東京教務所教区雇員として勤めさせていただき、ありがとうございます。

5年を経た私の課題となったことは「坊主(僧侶)とは乞食(こじき)である」という姿勢の徹底です。自らがお預かりしたものに對して法(教え)をかえしていく、徹底してそのことを貫けるかどうかが私の課題だと思います。

そもそも「僧侶」とは、とある宗教団体の

一セクトが定めた儀式を経た者に与えられる身分のようなものでは断じてありません。善導大師は『觀經疏』の中で

また在家というは、五欲を貪求(とんぐ)すること相續してつねなり。たとい清心を發(おこ)せども、なおし水に画(えが)くがごとし。ただ縁に隨いて普(あまね)く益するをもつて大悲を捨てず。

と世間の中、宿業因縁の最中において仏法に教えられていくのだと、「在家」の者たちの姿をそう表現されました。「在家の僧侶」とは宿業の中に飛び込んで、身に受けた教えを縁ある人に伝えていく、その人を指しているのでしょう。「僧侶」といってもそれは生き様(生き方)のことです。それも誰かに「僧侶」であることを証明してもらう必要はなく、自身その生き方を選んだのだと他ならぬ自分に証明していく、そのような生き方です。自らにそう課した者は、寺族であろうがなからうが、一宗教団体のセクトが「門徒」と定義する者であろうが、「僧侶」です。「在家の僧侶」です。その生き方を徹底し、縁のあった場所と出会った人の中で「在家の僧侶」であることを貫いていくことが私に問われているのだと思います。

「目読」ではなく「耳読」の味わいを

録音図書

聞いてらっしゃい

『阿弥陀經に聞く』連載中



2月 敬弔

本多 真様

群馬組 大泉寺 住職
2月15日命終 59歳

生前のご功勞を偲び、
念仏合掌して哀悼の意を表します。

涌ゆう

編集員の随筆



昨年の首相所信表明演説で目指す社会像を「自助・共助・公助」そして「絆」と言っていたことを思い出す。そもそも「自助・共助・公助」は防災・災害時の対策として用いられるものと認識している。それを社会像に当て込み「自助」を重視する姿勢は、弱者切り捨て、自己責任論に拍車をかけるものだと感じていた。

そして「絆」。「絆」は、これも災害時に「人と人のとの大切なつながり、結びつき」ということで、どちらかと言えばいい意味で使われる。しかし語源をたどると「馬などの動物をつないでおく綱」の意味である。人と人との「絆」も、互いが同じ思いの中にあるならば、大切に感じるかもしれないが、思いを異にすれば、関係を縛るものとなる。ましてや政府が「絆」と言うならば、国民を縛り付ける何物でもない。

それから数カ月、政府は今年2月「孤独・

孤立」対策大臣を新設した。コロナ禍での女性の自死の増加、20歳未満の子ども自死の増加を受けたものと思われるが、「孤独・孤立」は以前からの課題であったことに間違いない。「自助」を重視する姿勢から一転した形であるが、どのように対策が講じられるのか心配である。

この「孤独・孤立」を考える時、

我、今帰する所なく孤独にして同伴なし

と、源信僧都の『往生要集』に地獄の最下層「阿鼻地獄」に落ちた者が大声で泣きながら詠む詩を思う。地獄とは死して後に往く世界ではなく、今まさに地獄がある。そして今私たちが生きる世界と対比して浄土があるのである。浄土もまた死後に往く世界ではなく、今まさに出遇うべき世界であると強く感じる。

(東京1組 本明寺 本田 彰一)